

芳賀の史跡めぐり

-8-

長岡菊三郎の生誕地

高感度の「さくらフィルム」開発者

デジタルカメラ以前はフィルムカメラが一般的でしたが、フィルムの中でもロール写真フィルムの開発に携わったのが、長岡菊三郎です。

小神明町の生まれ

長岡菊三郎は明治十五年、勢多郡芳賀村小神明（今の小神明町）に生まれました。前橋中、二高（仙台）から東京帝国大学（今の東京大学）の理学部に進みました。明治四十一年、写真機材を生産する六桜社（小西六）現在のコニカミノルタの製造部門の会社）に入り、写真感光材である乾板乳



長岡菊三郎

剤の研究に没頭しました。しかし、翌年に研究室が解散となったため、六桜社を退社。中国に渡って、南京高等師範学校の理科部の教授になりました。ところが中国では明治四十四年に大きな革命（辛亥革命）清朝が滅び、孫文が臨時大統領となり中華民国誕生）が起こったので菊三郎は日本に帰国し、慶応大学（医学部予科）の教授となり教壇に立ちました。この頃は、まだ写真感光材には乾板（ガラスなどに感光剤を塗った写真材料）が使われていました。菊三郎は、大学で

続けていた感光乳剤の研究などが高く評価されて、大正十一年に再び六桜社に入社しました。「さくらフィルム」として時代の要請は、乾板か



生誕地

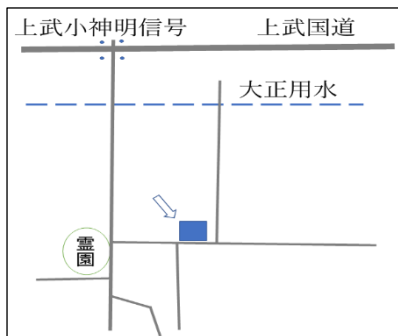
ら手軽で大量に写せるロールフィルム（巻き取り型）当時は白黒）へと移っていきます。当時の日本の写真工業は誠に幼稚で、フィルム等は一切輸入に頼っていました。菊三郎は、何とか国産のものを作り輸出するまでにならないものかと「高感度フィルムの研究」をテーマに、社の技師長として寝食を忘れて研究に打ち込みました。ところが、完成間近という時、関東大震災（大正十二年九月一日）が起こり会社は全焼し、今まで研究した資料すべてが焼失してしまいました。しかし、菊三郎は一層発奮し研究をす

め、遂にロールフィルムの製造を完成させ、「さくらフィルム」として昭和四年に発売となりました。そして、次の課題はカラーフィルムの開発でした。昭和三年・旭日写真工業が初めて国産フィルム（菊フィルム）を開発しました。しかし、東京での開発に成功したが浜松での量産化に失敗し遅れました。昭和四年・小西六写真工業が高感度フィルム「さくらフィルム」を発売。（昭和十一年・富士写真フィルムが「フジフィルム」を発売。）

カラーフィルム開発の前に残念ながら我が国初のカラーフィルムの完成の前に、昭和十四年、病气（胃癌）のため死去。57歳でした。六桜社は、菊三郎の功績をたたえ社葬

（青山斎場に於いて）をもってこれに報いました。日本でのロールフィルムの生産は、菊三郎の研究がなかったら、はるかに遅れていたであろうといわれています。小神明町の生家は昭和十八年に火災で母屋が焼失しました。その後、再建され、現在は菊三郎の兄の孫にあたる長岡次男さん（92）が住んでいます。庭には菊三郎が育った時代に建てられた蔵が残っています。

生涯学習奨励員 牧野 進



位置図

7月の主な行事予定

7月18日（木）芳賀公民館運営推進委員会（芳賀公民館会議室）
7月21日（日）群馬県知事選挙及び参議院議員通常選挙投票日